



夢は和菓子の研究所

東大博士号後、実家の店に

「三木屋本舗」藤沢雄太さん



大分市三ヶ田町の和菓子店「三木屋本舗」。長男の

藤沢雄太さん(29)は東大大学院で博士号(工学)を取得後、今年4月から和菓子職人の道を歩み始めた。プラスチックの研究で学会発表や論文執筆に力を注いだ日々から一転、次の夢に向けてあなごを練る。

午前6時半。つきたてのもち米が香る店内で、親子が向かい合って黙々と豆大福を包んでいた。

父の公三さん(81)が素手で等分に分け分けた生地を、雄太さんが手の中で広げ、あなご玉を包んでいく。公三さんは「不器用だと思っ

ろ。在庫管理や翌日の仕込みをして夕方に店を出る。菓子作りは父の作業を見ながら覚えていく。練ったあなごが緩かった時、みたらしのたれが硬かった時、何が原因かを自分で考えて工夫する。そのサイクルは研究室での実験と同じ。手を動かして試行錯誤するのが好きな雄太さんにとって、和菓子作りもまた魅力を感じられる仕事だ。

失敗許される所に



みでできている。子どもの頃から近くで見えてきたからかな」と目を細めた。

雄太さんは高校時代、大分上野丘高で化学部の部長を務めた。イオン泳動の研究で同部が日本学生科学賞の最優秀に選ばれ、高校生の科学オリンピックにも日本代表として出場した。1年間の浪人を経て、2016年に学校推薦型選抜で東大工学部に入學した。

夢に描く研究所は、職人が材料や工法、包装材など、和菓子のあらゆることを実験できる場。なぜ蒸したまんじゅうに亀裂が入ったのか。粉を長く保管する方法は。自分の店では挑戦できないことも、研究所なら失敗が許される。アイデアを試して新しい何かを見つける場にした、と考える。

和菓子職人は一年を通して四季折々の菓子作りを覚える。「1年で1周。自分



大学と大学院で研究テーマにしたのは自己修復プラスチック。接着剤なしで破損部分が直る素材で、車のコーティングや建築素材への実用化が期待されている。手を動かし、分からないことを解明しながら新しいものを生み出す研究作業が性に合っていた。

朝5時に起き、30分後には店に入る。午前中は赤飯や団子、豆大福など生菓子をこしらえる。その後、日持ちする商品を作り、一区切りつくのは午後3時こ

失敗を恐れず、やりたいことに突き進む。まだ駆け出しだが、いずれ、自分の挑戦が大分で和菓子職人を目指す人の力になれば」と願っている。

(渡辺美加)

早朝から豆大福作りに励む藤沢雄太さん(右)と父の公三さん。大分市三ヶ田町の「三木屋本舗」。撮影・首藤洋平

手動かし試行錯誤
将来は民間企業の研究職

将来は民間企業の研究職

将来は民間企業の研究職

(渡辺美加)



〔問①〕和菓子店「三木屋本舗」で和菓子職人の道を歩み始めた藤沢雄太さんが大学、大学院で研究していたテーマは何ですか？記事の中から10字で抜き出しましょう。

自己修復プラスチック

〔問②〕プラスチックの研究をしていた雄太さんが実家の和菓子店を継ごうと思ったのは、どんなことをひらめいたからですか？

和菓子の研究所があったら面白い

〔問③〕雄太さんが夢に描いている研究所とはどんなものでしょうか？それが分かる部分を記事の中から抜き出しましょう。

(解答例)

和菓子のあらゆることを実験できる場

アイデアを試して新しい何かを見つける場

〔問④〕雄太さんは「自分の挑戦が大分で和菓子職人を目指す人の力になれば」と願っています。あなたには将来の夢や目標がありますか。あなたのその「挑戦」が、どんな人たちの役に立つ（力になる）と思うか、理由も考えて書いてみましょう。

自由解答